生浜地域誌

21.6.30

第57号

発行　ＮＰＯ法人ちば・生浜歴史調査会

電話　０８０－５８８７－２５９２

『生実藩領椎名上郷の御用留』上梓しました。

千葉市中央区南西部から緑区西部の地域を江戸時代に支配した生実藩の生実役所からの通達回覧文書を、各村名主が記帳した「御用留（ごようどめ）」天保１０年（1839）１年間の記録を本にしました。

≪本書で取り上げた面白い史料≫

その１　藩主の領内巡見

九代目藩主が初めてお国入りした 9 月、領内の巡見をしました。椎名上郷（緑区茂呂町など当時 6 村 130 軒）では、名主が、殿様の昼食用に初茸を採って差上げたところ、家臣が塩焼きにして御膳にのせたと記録しています＜解説ｐ150・史料ｐ338（私たちは現在、醤油と砂糖でさっと煮て食べたりしますが、塩焼きは初めて知りました。また、塩漬けのうえ油で保存もしたようです）。その後に、藩から初入国の祝いとして 1 軒あたり 2 合 2 勺の酒を領分 1041 軒へ配給しました。＜ｐ151（酒の銘柄は不明です。配給作業が大変だったと思いますが、イベントの一つかもしれませんね。）

その２　鷹の餌にする小鳥を運ぶ

将軍の鷹狩り用の鷹を飼育している江戸の御鷹部屋へ、鷹の餌になる雲雀など小鳥を生きたまま運送したのですが、146 羽入りの籠２ケと 145 羽入り籠１ケの 437 羽を夕方 18 時に土気の宿場で受取り、21 時に野田宿（緑区誉田町 1 丁目）へ届け、遍田村（緑区辺田町）が運び千葉町へ 23 時に渡しました。遍田村は籠を持つ人足２・提灯持ち１・犬追い払い１・宰領１の 5 人で運送しました。＜史料・解説ｐ165（437 羽の小鳥へ水を飲ませたり、昼夜にわたる宿場継ぎ送りは大変だったと思います）。

その３　雨乞いの祈祷

天保 10 年は日照りで、農村では雨乞い祈祷をしました。雨乞いを口実に仕事を休み、御神酒で宴会をすることを禁じましたが、正当な祈願は許可されました＜ｐ154、（ｐ155 の資料は地元では保存の意志が無くて、現在はＮＰＯ法人ちば・生浜歴史調査会で預かっています。）

ＮＰＯ法人ちば・生浜歴史調査会

≪本会の古文書学習会の労作です≫

古文書の史料写真と墨書の漢字・読み下し文を併記していますので、くずし文字の学習に興味のある市民に参考になると思います。

本会の古文書学習会受講生が分担して史料写真の墨書文字の活字化・読み下し文・解説をし、さらに、緑区茂呂町に残っていた御用留を全部読んで、内容目録を 95 頁にまとめてあります。村々がどのように幕末を暮らしていたかを知る参考としても良いと思います。

≪ご希望の方には頒布いたします≫

Ａ４判 360 頁　@3300 円

連絡先　０８０－５８８９－２５９２・・・伝言であなたの電話番号をお知らせください。

またはメールで、oi２ha２ma@softbank. ne. jp

秋の歴史講座・歴史散歩で御用留の講演と現地見学を計画中！！！

【本文】

けふはことに日ものどかにて、かつしかの浦春のごとし。原宮内大輔胤隆（はらくないたいふたねたか）の小弓（をゆみ）の館（たち）の前、小浜の村の本行寺旅宿也。

【注釈など】

今日はことに日ざしものどかで市川の真間川は春のようだ。原胤隆の小弓城の前、浜野の本行寺が旅宿です。（文４）

※原宮内大輔胤隆―中世千葉氏の重臣でこの時は下総で最も有力な人物でしたが、永正１４年１５１７年足利義明入城の頃、武田氏により小弓城を追われました。（文２）

※その時の小弓城の所在地が現在の生実町、あるいは南生実町であるのかは確証に至っていないため、ここでは小弓城としました。

※本行寺とは顕本法華宗（にちぎょう）如意山本行寺のことで、この時の住職は二祖の日行でした。（文８）

当時の本行寺の場所は、浜村の東部、通称「谷（や）」にあった廃寺を興し、布教のための道場でした。（文３）

【本文】

十四・五日は、千葉の崇神妙見（すじんみょうけん）の祭礼とて、三百疋のはや馬の見物也。十六日は延年の猿楽（さるがく）夜に入てことはてぬ。

【注釈など】

１１月１４、１５日は千葉妙見宮（千葉神社）の祭礼に出かけ、三百頭の早馬が疾走する勇壮な様子を見物し、翌１６日は延年の猿楽があり夜になって祭礼行事がすべて終了しました。（文８）

※延年舞とは、寺院にて法会の後、貴人の接待時などに僧侶や稚児らによって演じられた芸能。（文４）（文８）

※千葉妙見宮は、千葉氏の氏神ともいうべき軍神でしたが、千葉氏が本佐倉城に移り、千葉に近い生実を本拠とする原氏が勢力を伸ばしたため、戦国時代には原氏の支配下にありました。この時の妙見座主は胤隆（たねたか）の子の範覚（はんがく）でした。（文８）

【本文】

十七日連歌有

あづさ弓いそべに幾代霜の松

あづさ弓いそべの小松たが代にか

万代かけて種をまきけん。

此本歌に小弓と云名をくはへて祝

し侍るばかり也

【注釈など】

１７日には原胤隆氏の館で連歌会が行われました

霜の降りた松は、この小弓の磯辺に幾千代の歳月を経たことだろう

磯辺の若松は、だれの代に万歳の祈りをかけて種をまいたのだろう。

「あづさ弓いそへの小松たれよにか万代かけて種をまきけん」は、『古今和歌集』の「梓弓磯辺の小松たが代にか万代かけて種をまきけん」（読み人知らず）という歌をふまえ、館のある「小弓」という地名を梓弓によせて、ご当地への祝意をこめたものです。（文４）（文８）

【本文】

此館は南は安房・上総の山たちめぐり、西北は海はるばると入て、鎌倉山よこたはり、富士の白雪半天に指おほひて見ゆ。駿河国にてみるよりはなをほどちかげ也。遠くてみるはちかき山成べし。

【注釈など】

小弓の館は、南は安房上総の山々が立ちはだかるように見渡せ、西や北に江戸湾が広く入り込み、鎌倉の山地が見渡せました。富士山の雪が天の半ばまで覆っているようにみえる。不思議なことに静岡県駿河で見るよりは、なお距離が近そうである。遠く離れて見るべきものは、かえって近くにある山なのだろう。（文４）（文６）

※胤隆の法名は不二庵全覚で、この館からの富士山の眺めにちなんでいるのかもしれません。（文８）

※「遠くてみるは・・」では、何故か室生犀星（むろうさいせい）の「ふるさとは遠きにありて思ふもの・・」が浮かんできました。（筆者談）

【本文】
十九日に又連歌有。発句胤隆
さえし夜の嵐やふくむけさの雲
心あたらしく風情至極せり。
庭にかつちれ雪のはつ花
発句に景気ことつきぬれば、
ただ今朝の様ばかり也

【注釈】
十九日にまた連歌会がありました。発句は胤隆
冷えさえた昨夜の嵐を含み残すのか、今朝の雲の動きが急であるよ
新鮮な詠みぶりで、情趣がすばらしい句であった。
なおまた、雪よ、庭に散りしけ。
冬の初花として発句で叙景が尽くされたので、自分は今朝の情景を詠んだだけである（宗長の脇句）（文８）

【本文】
けふは一座もするするとして日のうちに終ぬ。夜に入て延年の若衆こゑよきかぎり廿余人、吹、はやし、ととのひ、舞、うたひ優におもしろく、さかづき数そひ、ももたび心ちも狂するばかりにて、暁ちかくなりぬ。のこりおほかりし事成るべし。

【注釈など】
その日は胤隆、宗長を中心とした一座は句に難渋する者もなく、スムーズに進行し日中に会が終わりました。夜になると延年を舞った若衆から選ばれた美声の者二十人あまりが、笛を吹き囃し、太鼓や鼓を打って拍子を取り、舞って謡いました。その様子は優雅で趣があり、見物していた宗長たちの杯も進み、何度も狂するばかりの境地を楽しむうちに、明け方まで過ごし名残を惜しんだのでした。（文８）
※この若衆は妙見宮の祭礼で延年の猿楽を行った者たちでしたが、宗長を歓迎するため、胤隆が呼び寄せたのでしょう。（文８）
※浜野村海浜、宗長滞在中（１３日～２０日）の月は十五夜前後なので、潮の干満の大きい頃です。（文４）

【本文】
又、浜の村本行寺にして、
声遠し月やしほひのはま
胤隆此第三、終日心ゆきし一座也。

【注釈】
再び、宗長は浜野の本行寺に戻りましたが、そこでも連歌会が催され月明かりの潮の干いた浜で、遠くに鳴く千鳥の声が聞こえるよと発句を詠みました。
脇句は本行寺の住職（日行）が付けたようですが記されていません。胤隆は第三番目の句を詠み、その日は１日中心ゆくまで楽しんだ一座でした。

【本文】

小弓にて盃たびたび、ざれごとなどいひし、はたちばかり成、其行するにや、あす立ちなむとする夜更て来りて、月まちいづるほどもなく立帰りし名残、ねられぬ老のすさびに、

おもひやれ磯のね覚のもしほ草しきすてうし老のしら浪

ともなひきたりし人のかたへ朝に申つかはし待也。

【注釈】

前の晩の酒宴で戯れ言を言った二十歳ばかりの若衆が旅の行先の関係からか明日出立しようとする日の夜が更けてから尋ねてきたものの、日の出る前に帰ってしまったので、老いのすさびとして眠れぬままに名残を惜しみ、（文４）（文８）

製塩のために掻き集めて、敷き捨てられた藻塩草のように、眠れぬ夜に浜辺で白波の音を聞いている、老いた私のことを思いやってください。という短歌を詠み、翌朝若衆を伴ってきた人に遣わしました。（文８）

こうして、原胤隆の歓待を受けて過ごした宗長でしたが、何故か目的だった清澄見物をせずに帰途につくことになりました。

【本文】

はまのむらをたちて、けみ川と云所に、浦風あまりはげしかりしかば一宿して、いまだ日も高かりしに、人びと物語のつゐでに一折などの事にて、玉かしは藻にうづもれぬあられかな可睡軒（かすいけん）ここまで打送て、旅宿のなぐさめとりどりにして、翌日、市川と云わたりのおりふし雪風吹きてしばしやすらふあいだに、むかひの里にいひあはする人有て、馬どものりもて来て、やがて舟わたりして、あしのかれはの雪を打はらひ、善養寺と云に落つきぬ。

【注釈など】

浜野村を出発して江戸湾に沿って西に向かいましたが、浦風があまりにも激しかったので、検見川（千葉市花見川河口の地）という所で一泊することになりました。まだ日も高かったので、一行は物語のついでに連歌を詠み、宗長も水底の美しい岩が、藻に埋もれずあられとなってほとばしっているよという句を詠んでいます。（文４）（文８）

可睡軒がここまで見送って来て、旅宿での慰めごとをいろいろしてくれて、翌日、市川に着きました。渡に着く折から、雪風が吹いてしばらく休息する間に　、対岸の里と連絡しあう人がいて、馬などに乗って来て、そのまま舟で渡って、葦の枯れ葉に積もる雪を打ち払いながら、善養寺という所に到着しました。（文４）

※可睡軒とは小弓あるいは千葉あたりの連歌師でしょうか（文８）

参考文献及び引用文献
(文 1)・宗長作品集〈日記・紀行〉古典文庫四四三冊　重松裕巳　古典文庫 1983 年
(文 2)・千葉市南部の歴史　宍倉健吉　千葉市教育委員会 1986 年
(文 3)・郷土のあゆみ　生浜郷土史研究会　三晃社 1989 年
(文 4)・中世日記紀行集　新編日本古典文学全集 48　東路のつと　伊藤敬　小学館 1994 年
(文 5)・千葉県の歴史　石井進　宇野俊一　山川出版社 2000 年
(文 6)・中世日記紀行文学全評釈集成第 7 巻　東路のつと　伊藤伸江　勉誠出版 2004 年
(文 7)・千葉市の戦国時代城館跡　千葉市立郷土博物館　2009 年
(文 8)・戦国の房総を訪れた連歌師宗長「東路のつと」を読む—城西国際大学日本研究センター紀要第 6 号　外山信司　2011 年 1 月講演録
(文 9)・シリーズ藩物語　生実藩　西村慎太郎　現代書館 2017 年

あとがき

今から約 500 年前(1509 年の室町時代)にタイムスリップ

3 月上旬のある日、ＮＰＯの会員の女性の方から 1 枚の用紙をもらいました。それは、花見川区の友人から、同区にある検見川小学校の「学校だより」の中の「検見川の歴史」の中に、「浜野の事が書いてあったので差し上げます」と渡されたものとのこと。

そこには、室町時代の連歌師(れんがし)柴屋軒宗長(さいおくけんそうちょう)が書いた「東路のつと」という今から約 500 年前の紀行文の一節が書かれておりました。

「はまのむらをたちて・・・・けみ川という所に・・・」というものでした。

—ＮＰＯ会員　清六・記—

柴屋寺と宗長

〒421-0103　静岡市駿河区丸子 3316　電話 054-259-3686

宗長の父は刀鍛冶師であり、駿河今川の六代目義忠の刀を作っていた。三男の宗長が聡明で利発な子であったので義忠は京の一休宗純のもとに弟子入りをさせた。宗長はその才覚を現していく。応仁の乱の後、今川氏真(うじちか)八代目は丸子に文化を広めるために宗長を呼び寄せ、その施設として寺が建立された。庭は宗長の歌会用に造園されたものだそうだ。また、宗長の木像も寺蔵されているとの事で肖像画と共に伺えば拝見できるそうです。・・・柴屋寺へお電話してお聞きしました・・・